

先日の新聞記事に、「デジタル化 進まぬ学校」というのがあった。それには次のようなことが書かれていた。東北地方のいくつかの学校では、教頭が毎朝大量に来るメールの添付ファイルを先生の人数分コピーして配布する、文書ソフトは「一太郎」と決まっているので外部と共有する時は「ワード」に変換して送信する、等々。IT化を手助けする支援員の女性がさすがに見るに見かねてやりわりと改善を提案したが、年配の教員から「これまでのやり方の方が早い」と一蹴された。

「こういう人いる、いる」と納得しながら読んだ。「今までのやり方でなぜ悪いのか」と支援員にくっついてかかる年配の教員の様子が目に浮かぶ。デジタル化は教員間、教員と保護者・生徒間を結ぶものなので、この流れに乗ってこない教員がいると先に進まない。パソコンの数が足りないとか、設備が不十分ということもあるが、これはひとまず置いておくとして、新しいことを学ぼうとしない人には無性に腹が立つ。私は二年前に初めてZoom・Teams・Meet等を使い生徒への授業や連絡をした。使用するツールは各学年に任されたので、バラバラになり、「どれか一つに統一してくれ」と心の中で叫びながら、どんどん溜まっていくストレスと格闘した。

しかし、苦勞した結果それらを使いこなせるようになると、「あの時つらかったけれど、苦勞して本当によかった」と感謝の気持ちさえ出てきた。苦勞なくして喜びは生まれない、とずっと思ってきたが、納得した出来事だった。

前述の年配の教員は新しいことを学ぶのが面倒なのであろう。別の話だが、教科書会社の人曰く、「教科書に新しい内容を入れようとする先生方から嫌な顔をされるんですよ。勉強しなくてはいけないからと」。これも聞いた話だが、「現役のところ毎日の一番の楽しみはおいしい給食でしたね。本当においしかった」。ここまで来るとさすがに子供たちが気の毒に思えてきた。

私はこの方たちを反面教師として利用させてもらっている。